

現代アルジェリアにおける家内労働と女性 —手工芸分野の内職を通じた伝統的役割の検討

山 本 沙 希*

Women and Domestic Work in Contemporary Algeria Examining the Traditional Roles through Artisanal Handicrafts

YAMAMOTO Saki

Abstract

Les travaux rémunérés à domicile font partie intégrante de la participation des femmes algériennes à la vie économique. Parmi lesquels, l'artisanat est à la tête et une majorité d'entre eux sont classés dans la catégorie de "l'activité traditionnelle". Pour cela les femmes sont souvent traitées en tant que "conservatrices de la tradition" depuis l'époque coloniale en exerçant leur rôle ménager tels que la broderie, le tissage ou la couture dans la sphère domestique.

Cet article porte à réflexion sur la transition du statut de telle activité par rapport aux coutumes basées sur la distinction de l'espace ou du travail. Etant donné que les femmes en milieu urbain occupent une bonne place de la population totale des travailleurs à domicile, les entretiens ont été réalisés auprès d'une vingtaine d'artisans à Alger. Les 3 caractéristiques du travail représentés sont: accessibilité aux femmes sans niveau d'études supérieures, volonté autonome renforcée et apprentissage des stratégies de négociation avec sa famille. Compte tenu qu'elles cherchent l'autonomie et l'occasion de sortir en jouant leur rôle de mère/femme ou de fille au sein de la famille, elles demeurent non dans la division des fonctions fixée entre homme et femmes mais leur travail permet de la réviser.

Keywords : Algeria, women, artisanal handicrafts, domestic work, household

I. 研究の背景と目的

アルジェリアにおける女性の経済活動への参加を扱う従来の研究において、女性が従事する活動分野は家内労働としばしば結び付けられてきた。これらの活動は機織りや陶芸といった「手工芸」を中心とし、もともとは直接的な現金収入を伴わないものの、貨幣経済が浸透する以前から村落の日常生活に潤いを与えるために娘や妻＝母としての女性に課された役割であると同時に、家内労働を通じた伝統儀礼の遂行など、地域や家族の伝統を保護・継承する役割をも担っているという意味づけが行われてきた [Makilam 1996]。フランスの植民地期には被服縫製・仕立てや菓子製造と同様に有償の家内労働として現金収入をもたらす内職へと変容し、現在においてはこうした内職従事者の数は公式統計上だけでもアルジェリア全国で38万1千人（就業人口の3.5%）、そのうち9割を女性、6割を都市在住女性が占める [ONS 2013]。中東・北アフリカ地域におけるこうした内職従事者は自宅あるいはそれに準ずるような工房（アトリエ）を職場としているために可視化が困難であり [Kelkoul 1995]、その収入の不安定性や伝統的性別役割に基づく仕事という特徴から自立や地位向上には繋がらないと

キーワード：アルジェリア、女性、手工芸、家内労働、世帯

*平成25年度生 ジェンダー学際研究専攻

指摘され、家内労働が既存の力関係に与える影響については消極的な見方が示されてきた〔鷹木 2002; Berik 1987〕。このような先行研究の指摘を踏まえ本稿では、現代アルジェリアの首都アルジェを事例に、手工芸をはじめとする伝統的家内労働を通じて女性の意識や家族的地位に生じる変化を考察することで、伝統的とみなされる労働が世帯内の既存の力関係や自立意識形成にもたらす影響を検証する。それにより、従来の研究で強調されてきたアルジェリアの「伝統的役割としての家内労働」という位置付けを再考することが本稿のねらいである。

Ⅱ. 先行研究の検討と家内労働の特徴

1. 先行研究と本稿の位置付け

女性が家内労働を通じ家族や地域の「伝統」を保護・継承する役割を担うという見方は、仏植民地期アルジェリアの女性と労働に関する研究において既に強調されている。1937年から2年間、ベルベル系¹人口が集まるカビール村落に学校教員として滞在したChantreauxは、小さい頃から父親または将来の夫への服従を教え込まれ、男性に比べ道徳教育や礼儀作法について厳しく教育されると同時に、畑仕事や水汲み、羊毛紡ぎに機織り、陶芸に至るまであらゆる家事労働をこなす村落女性の姿について記録した。だがその一方で、羊毛紡ぎから機織りまでの一連の工程は細かな儀礼と慣習に基づいて行われ「先祖代々受け継がれてきた伝統の保護者」としての女性の役割は副次的どころか第一義的で、社会の安定を左右する力を有していると肯定的に捉えていた〔Chantreaux 1990〕。アルジェ都市部では、1910年代から20年代に人口流出が進み、廃品回収や薬草・ハーブ摘みといった零細規模の活動、または機織りやたばこ産業での雇用、家政婦や階段掃除婦など家庭外就労に従事する「ムスリム原住民女性」についての記述が見られる〔Laloué 1910〕。だがLalouéは、こうした家庭外就労者は少数派で、水汲みや買い物、散歩を除いて女性が家を離れることは滅多になく、僅かな賃金をもたらす労働でも家庭内で行われる糸紡ぎや手芸、裁縫など特別な道具や技術を要さない活動が好まれる傾向にあったと指摘した。

これら先行研究は、女子教育や職業訓練が普及する以前から女性は家庭内で母親から技術を習得し収入に繋がっていた一方で、無償／有償に関わらず女性の活動の場は家庭とその周辺に限定されるという伝統的な性別役割規範が存在し、維持されていたことを示している。しかし村落ではこうした分業体制が「伝統文化の継承」という男性には不可侵な領域における女性の地位をも保証していたと評しており、家内労働を「守るべき伝統」と結びつけ、それを維持・継承するのが女性の特別な役割とみなしていた。このように、家内労働を伝統の象徴と結びつける見方はアルジェリア独立後の研究においても共有されている〔Makilam 1996〕。こうした視点に対し、本稿では、教育が普及し女性の家庭外就労者が増えつつある中で「家庭内領域」も現在進行形で変化していること、および性別だけでなく階層による差異の影響〔Messick 1987〕も指摘されていることを踏まえ、内職に従事する女性の学歴をはじめとする社会階層や家庭環境にも留意しながら、家内労働という伝統的性別役割に則った活動が世帯内の力関係や女性の自立意識にもたらす作用を考察したい。

2. 女性の経済参加と家内労働の傾向

アルジェリアにおける女性の経済参加率は依然として低く²、1966年には全就業人口のうち女性が占める割合は5%、アルジェ県では8%に過ぎなかったのに対し、2013年には全国で16.6%、都市部では19%に上昇した〔ONS 2013〕。分野別では男女ともに医療、教育、行政分野といった非営利サービス分野に集中しているが、管理職に就く女性は1割にも満たず、労働市場への参入をめぐる男女間の差異は性別役割規範を強く反映している。

家内労働者数は1977年の4万2千人から1992年には16万3千人、2013年には38万人へと倍増し、アルジェ県を中心とする都市部では25万3千人で、その9割は女性、過半数は既婚女性が占める。アルジェリアの公式統計上では1977年に初めて「専業主婦」と「部分的に就業状態にある女性」が区別され、「自宅で何らかの経済活動に従事する女性」に関心が向けられるようになった。1989年から1991年までは家内労働に特化した調査が行われており〔ONS 1989; 1990〕、当該調査では「部分的に就業状態にある女性」の項目は削除され、女性に限定しない「家内労働者」という項目が加えられた。以降、アルジェリア統計局は「家内労働者」を「自宅内において、収入をもたらす何らかの経済活動に従事している男性または女性」と定義し、その活動例として手工芸や裁縫・刺繍、美容業を挙げている。よって家内労働の形態としては「加工作業のみを請け負い、工賃を受け取る内職」

に限定せず、材料の調達から完成品の販売までを労働者自らが行う場合も含んでいる。

Ⅲ. 調査方法

1. 調査概要

調査は、アルジェ県において2013年から2015年の間の計3回（2013年10・11月、2014年10～12月、2015年5～7月）に分けて実施した。調査対象として選定したのは、主にアルジェ県在住で、手工芸分野に従事している女性20人（表1参照）である。女性の「伝統的役割」としての家内労働の位置付けを再考するという本稿の目的に基づき伝統工芸・手工芸分野の女性就業者を対象とし、彼女たちの語りの中で性別役割と仕事としての家内労働がどのように受け止められているか概観できるように配慮した。学歴別では、対象者のうち中卒・高卒者は20人中14人、大卒者は6人で、中卒・高卒者に偏っている。しかし、アルジェ県在住女性のうち大卒者が占める割合

表1 調査対象者一覧

※（公）は公立、（未）は未成人、（成）は成人の略

	対象者	年齢	最終学歴	過去の就業経験 (Dのみ現職)	活動分野	婚姻形態	同居家族	世帯主と 就業状況	世帯の 主な収入源
1	A	49	高卒（公）	会計士 (1年)	ポーセラーツ・ ガラス絵付け	既婚	夫・ 息子1（未）	夫（自営業）	夫の収入
2	B	49	中卒（公）	なし	ガラス絵付け	夫と死別	娘1（成）・ 息子1（未）	B（内職）	夫の年金と Bの収入
3	C (隣県在住)	22	大学 在籍中	なし	ポーセラーツ・ 造形芸術	独身	両親・ 弟3（未）	父親（民間 企業勤務）	父親の収入
4	D	24	修士課程修了	大学講師（現職）	アクセサリー 製作	独身	両親と弟1、 妹3（未）	父親（医者）	父親の収入
5	E	24	大卒	なし	ガラス絵付け、 装飾	独身	祖母	祖母（無職） ※両親とは別居	亡祖父の 年金
6	F	60代	大卒	中学校教員 (定年退職)	刺繍	既婚	夫・ 息子2（成）	夫（定年退職）	夫とFの年金
7	G	58	高卒（公）	図書館事務 (定年退職)	モザイク	既婚	夫・ 息子2（成）	夫（定年退職）	夫とGの 年金・収入
8	H	65	高卒（公）	なし	伝統衣装・ 被服縫製	既婚	夫・娘2、 息子1（未）	H（内職）	Hの収入
9	I	35	大卒	なし	ミニアチュール、 装飾、靴製作	既婚	夫・ 息子2（未）	夫（大学教員）	夫の収入
10	J	41	中卒（公）	なし	伝統衣装・ 被服縫製	離婚	息子1（成）	J（内職）	Jの収入
11	K	51	高卒（公）	中学校教員 (結婚時に退職)	アクセサリー 製作	既婚	夫、息子2、 娘1（未）	夫 (中小企業経営)	夫の収入
12	L	39	高卒（公）	不動産屋の事務 補佐	伝統衣装・ 被服縫製	既婚	夫・ 息子2（未）	L（内職）と夫 (警察庁雇用の 運転手)	Lの収入
13	M	29	修士課程 在籍	料理教室の講師 (3か月)	装飾、 キャンドル製作	独身	両親、 兄弟姉妹10 (成・未)	兄 (飲食店経営)	兄の収入
14	N	35	高卒（公）	アートギャラ リーの販売員	造形芸術、 木材絵付け	独身	母、兄弟 姉妹12（成）	母（専業主婦）	兄弟姉妹で 分配
15	O	68	大学中退	石油公団事務 (結婚後退職)	刺繍	既婚	夫	夫 (病気で退職)	Oの収入
16	P	60代	高校中退	国営銀行 (定年退職)	編み物・ ニット製品	独身	母、姉	母（専業主婦）	Pの年金
17	Q	38	大卒	民間企業のア シスタント	銅板彫刻・装飾 ・造形芸術	独身	母	母（専業主婦）	Qの収入
18	R	39	高校中退	なし	(衣装用) ビーズ装飾	既婚	夫、 息子2（未）	夫（税務署勤務）	夫の収入
19	S	43	高卒（公）	なし	銀製アクセサ リー・装飾品	既婚	夫・娘2、 息子1（未）	S（内職） ※夫は自営業	Sの収入
20	T	50	高校中退	なし	刺繍	既婚	娘2（成）、 息子2（未）	夫（障害者施設 勤務）	夫とTの収入

(注) 記載データは、全て2015年7月時点の情報である。

合は1割弱に過ぎないことと比較すれば〔ONS 2013〕、本調査対象者は、相対的に高学歴所持者の占める割合が高い傾向にあった。平均世帯員数に関しては、4.85人とアルジェ県平均世帯員数5人とほぼ同等だが、実際には2人～14人とばらつきが見られた。

IV. 考察・結果

本節では、家内労働従事者20人の語りから、まず技術習得・職業選択の段階で性別役割規範がいかに関連しているかに注目した。次に、世帯収入のうち対象者の収入が占める割合およびその用途をめぐる世帯内の意思決定を検証することで、家内労働を通じて女性の自立意識形成にもたらされる影響を分析し、その上で収入獲得という経済的側面以外の、世帯内の力関係に及ぼす作用を検証すべく世帯内の交渉過程に視点を移して議論を展開する。

1. 技術習得・職業選択と性別役割規範

対象者20人のうち、内職技術を家庭内で習得したのは12人（C～F、J、M～P、R～T）、家庭外は5人（A、G、I、K、Q）、自宅で基礎を学んだ後、より技術を高めるために職業訓練を受けた・見習い経験を積んだというのは3人（B、H、L）が該当した。このうち、家族・親族から学んだ経験を有する6人（H、L、O、P、S、T）は、手仕事の習得を幼少期における自身の役割であったと捉えており、これは幼少期の経験が現在の活動分野に直接的に反映されていないEとMにも共通していた。以下のSの語りからは、家業手伝いや家事労働の一環として、女子は早い段階で家庭内生産に貢献していたことが分かる。

私の家はもともと母方の祖母がこの仕事（銀製アクセサリー・装飾品製造）を始めて、父方の祖父、父、母も祖母に学んで同じ仕事をしていた。私は小さい時からずっと仕上げ作業だけ手伝っていたけど、高校卒業と同時に本格的に仕事を教えて貰うようになったの。（S）

Sは高校卒業後進学せず、結婚までの4年間、祖父から仕事を伝授されている。家庭内で技術習得した他の対象者も「仏統治時代、祖父はフランス人の間で有名なモデリストで、祖父が残したミシンで祖母と叔母が私たち姉妹に教えてくれた」（L）、「午前はクスクスやパン作りなどの料理、午後を刺繍などの活動に充てる習慣だった。これは若い女性にとって結婚に向けた準備の一環でもあり、しなければならないこと（*lazm*）だった」（T）と語り、手仕事の習得は特に若い女性にとっての義務であったと捉えている。「今はもうそんな時代じゃない」と述べる20代前半のEも「女の子は手に職をつけないといけない」と祖母に言われ育っており、対象者の世代に関係なく性別役割を強く意識した発言が見られた。

家庭外で内職を習得した対象者は、活動分野を自ら選択して公立または民間の職業訓練センターで学んでおり幼少期の家庭環境による影響は少ない。活動を始めた理由も「定年退職して空いた時間を埋めるため」（G）、「芸術全般が好きで」（I、Q）、「何でもいから自宅の外に出て、何かを学びたかった」（K）と述べ、彼女たちの積極性が感じられる。収入を得るために始めたA、HやLも同様で、学業の失敗が契機であるというLは「高校生の時、大学入学資格試験に通らなくて失望したの。それで裁縫を続けていくと決断し、知人のモデリストのもとで3年間、賃金は貰えなかったけど経験を積むために見習いをさせて貰った」と語り、大学進学断念と同時に、裁縫を自らの専門分野として選択していた。

以上のことから読み取れるのは、「家庭内で母から娘へと受け継がれる活動」という性別役割に基づいた技術習得の構図は依然として維持されている一方で、自ら活動分野を選択できる範囲も拡がり、固定的な分業体制や規範が通用しづらくなっているということである。なかには職業訓練の講座履修を口実に外出の機会を正当化でき、低学歴で労働市場参加が難しい場合には、内職は現金収入獲得のための貴重な手段ともなっていた。実際、男女の学歴別雇用率を比較すると、男性は初等・中等教育修了者の就業率が最も高いのに対して女性は学歴の高さに比例して雇用率も上昇しており、低学歴であればあるほど就業機会は限られる〔ONS 2013〕。本調査においても対象者20人中、高卒以下の学歴所持者が過半数（14人）に上るという事実は、低学歴の女性にとって職業選択には制約があり、その中で内職は現実的かつ身近な選択肢であることを示唆している。それに対して、大卒

の学歴を有するD、E、M、Qと現在大学在籍中であるCの5人は、趣味で装飾やアクセサリ製作を始め、徐々に商品化していった経歴を有する。だが、Qの父親は「大学まで通ったのだから自宅の外で安定した職に就くように」と娘の就職を強く望み、Qは「父親に隠れて絵を描いていたけれど、見つかるたびに怒られていた」という。このように、女性の高学歴化に伴い内職に従事する大卒者も増加する一方で、低学歴者が従事しやすいというイメージが内職に対する社会的評価を低下させ、その結果、家族に理解して貰えないという問題も生じていた。

2. 収入の使途と家計消費支出をめぐる世帯内の意思決定

(1) 世帯収入の創出と自立意識の形成

家内労働で収入を得るようになった背景としては20人中17人が現金収入の必要性を挙げ（G、K、Pを除く）、そのうち8人（B、E、H、J、L、O、Q、S）は内職による収入で家計支出の主要部分を負担していた。また、既婚者のうち夫より収入が多いのは12人中5人（H、J、K、L、S：元夫より多く稼いでいた離婚者含む）、収入の一部でも家計に入れているのは20人中14人（A～C、E、G、H、J、L、N～Q、S、T）が該当した。

アルジェリアの家族法では、通常、妻と子どもの扶養義務は夫にあり、息子は成人するまで、娘は結婚の成立時まで父親が面倒を見ることになっているが、そうでない場合は妻にその役割が課せられる³。調査対象者の中でも、女性が家計に収入を入れるか否かは、内職による収入の大小よりも夫や父親の就業状況や収入レベルが大きく影響していた。例えば20人中収入が最も多いDとKは、両者とも自身の収入を家計に入れることについて「私も両親も受け入れられない」（D）、「収入は夫に報告するし、夫も興味は示しているけど、私のお金には触らせない」（K）と語り、家計には一切入れず、夫や父親が世帯主⁴として家計を負担する責任があると認識していた。それに対し、既婚者・既婚歴のあるHとJは「結婚してから夫は一度も働いていない」（H）、「前夫は、夏の間だけ飲食店で働いたりしていたがそのうち働かなくなった」（J）と述べ、「生活がとても苦しかった」（J）、「子どもを食べさせる必要があった」（H）と、現金創出の必要性から収入を得るようになったと説明する。しかし彼女たちは内職で家族を養えるだけの収入が得られるという自信と、「裁縫が好きで始めた」という仕事に対する思い入れを強調し、働くことを単なる負担とは捉えていなかった。BとO、Tの3人も成人している息子・娘には金銭面で頼らないよう配慮しており、就業中の娘に対しBとTは「嫁入り道具購入のための資金を蓄える必要がある」と結婚費用の捻出を懸念していた。このように夫に労働意欲がない、あるいは子どもに頼れない事情を抱え彼女たちが一家の稼ぎ手とならざるを得ない場合、内職は働き方によっては家計に必要な収入の捻出も可能にする。その上、被服縫製などは専門技術や長年の経験に基づく職人としての勘を必要とすることから、HとJは自らの仕事に誇りを感じ、現金収入創出以外にも仕事に対して特別な思い入れや価値を見出していた。

娘の立場にあるDとE、Mは、前述したBとTの娘と同様、内職による自身の収入を結婚準備に充てる予定でいた。Dは「花婿側は家具全般、花嫁側は絨毯などのリネン類を揃えないといけないけれど、全部揃えるとなると高いし、たとえ私の稼ぎが良くても足りない。結局両親が少し援助してくれている」と述べ、医者である父親の収入は安定しているにも関わらず全額父親が負担して然るべきとは考えていなかった。まだ学生であるCは「私は経済的に自立している」と強調し、実際にDの5分の1程度の収入に過ぎないにも関わらずその一部を家計に入れ、必要なものも全て内職による収入で購入し「自分は長女だから」という責任感や妹・弟への配慮を見せていた。彼女たちは、父親にその扶養義務があるにも関わらず、親に全面的に頼ることに抵抗を感じ、その範囲や程度に個人差はあれ、できる限り自らの出費は自分で負担するよう努めていた。

以上の語りから認められるのは、家内労働に従事する女性は一枚岩ではなく、貧困化や男性に代わり家計を支えざるを得ない状況にあるという現実と、仕事を通じて自立意識が強められるという、女性たちのなかでの両極化の側面が見られることである。そのため全ての女性を「自立」という言葉で括れないが、収入の必要性から始めた場合においても、長年の経験に基づく技術や勘が自信に繋がり、仕事への意欲を高めるに至っていた。

(2) 家計管理形態と使途をめぐる意思決定

アルジェリアではイスラームに基づく夫婦別産制が原則であるのに対して、フランス統治下の時代にはすでに貧しい「ムスリム原住民」家庭において女性の収入は家計に入れられていたことが確認されている[Laloué 1910]。本稿の調査対象者の中にも共有財産を有する世帯が確認されたが、アルジェリアの社会・文化人類学研究所（CRASC）と応用開発経済研究所（CREAD）が2012年に実施した調査⁵では、調査対象者のうち4割が

このような共有財産を有していると答えており、その上家計管理の決定権を握るのは男性1割に対して女性は4割に上るという結果が示された。夫や父親、兄弟と同居している調査対象者に関して言えば、家計支出の主要決定権を握るのは14人中4人（H、L、O、S）、必要に応じ話し合って決めるというのは3人（A、G、N）が該当し、このうちAとOを除いては夫と同等かそれ以上の金額を家計支出として負担していた。そのため内職による収入が世帯内で重要な割合を占めるほど普段の食費から家具等の高額支出に至るまで家計支出の決定権は女性が握る傾向にあり、男性の就業状況や収入レベル、階層や家庭環境によって、世帯内で女性の収入が占める位置も変動すると言える。

3. 家族の反対に接した時の対応

アルジェリア統計局によれば、家内労働に従事する理由を「外で働くことに対する家族の反対」と回答した女性は4割に上り〔ONS 1990〕、女性の職業選択をめぐる世帯内の親子または夫婦間の力関係が反映されやすいことが明らかになっている。しかし調査対象者のなかには、家内労働でも外出の機会が増える等の理由で、技術習得や展示販売を始める上で家族の反対に遭う例が往々にして見られた。対象者20人中10人は身内に反対された経験があり、主な理由として家を留守にする機会が増える（＝育児・家事が疎かになる）（K、S、T）、女性が一人で出歩くことへの懸念（E、J、K、R、S）、顧客など見知らぬ人が家に出入りすることへの抵抗（D、L、R、T）、収入を得ることへの嫉妬（A、J）が挙げられた。夫や父親の反対に遭った対象者は、様々な説得や交渉を重ね、互いの妥協点を模索しながら自らの意思や願望を実現に導いている。ここでは、彼女たちが用いた交渉過程や説得に用いた戦略を述べて考察分析していくことにする。

単身かつ大卒の学歴を有するD、E、Qの3人は、学生の頃から趣味として内職を始めたが、それぞれ職業として販売を始めるにあたり父親の反対に遭った。Dは父親の性格を「特別厳しすぎるわけではなく、理解を示してくれる」と評価する一方で、内職を始めた時にDは学生だったこともあり、反対されたという。Dの父親は、趣味として活動する分には良いが学業優先であるとして、Dが販売を通じて収入を得ることは拒否した。そのような父親に対しDは「学業優先をまずは厳守し、勉強に対して真面目な姿勢を見せることで、販売も認めて貰えるようお願いした」という。父親の了承を得るには「時間がかかった」というが、学生の間は夏季休暇中など不定期に販売機会を得て経験を積むという点で合意した。これは、現在学生であるCの事例にも共通する。Dは、大学卒業後に販売を本格化させ、現在は材料を国外から買い付け、展示販売の参加だけでなくウェブサイトでの販売や受注も行っている。さらに、「内職だけでは退屈するようになった」との理由から大学講師の職にも就き、その仕事と並行して月1回の頻度で、自宅の一部を利用して他の女性たちと合同で展示販売会を企画・開催している。Dは、この自宅の一部を利用するために両親を説得するのも「大変だった」と振り返るが、「私が考案したアクセサリーやデザインは需要があるし、顧客がついているのを見せることで仕事に対する理解を得られるようになった」と言い、さらに外出時の門限など家の規則を守ることで信頼を強め、父親の了承が得られるようになったと説明していた。しかし、Dは「父が私の意思を尊重する範囲には限度がある」と述べ、「その境界を見極めることも大事」だと考えている。

既婚者の場合、結婚や出産を契機として、妻が働くのを男性側が拒否する例が見られた。仕事を辞めた理由を「夫が望んだから」と回答したのは4人が該当し、彼女たちは自らの意思ではないことを主張する。A、J、K、Rの4人は、内職を始めるにあたり夫の強い反対を受けている。Rは、以前は学校の警備員として勤務していたが、夫が専業主婦として家庭に入ることを望んだため結婚と同時に退職した。夫について「とても厳しい人」と述べ、日常的な買い出しも夫が行い、Rが単独で外出する機会は非常に限られている。Rは、このような夫に対して、自宅外で手に職をつけたいと申し出ても相手にしてもらえないことは予想していた。そのため、当時すでに近所で仕立て業を営んでいたLと話をし、Lのもとで技術習得の見習いをさせて貰えるよう説得することにしたという。LとRは同地区内に居住し旧知の仲で、夫同士も顔なじみである。自宅外でも、遠くの見知らぬ場所よりは近所の知人宅のもとであれば許可する可能性も高いと考えてのことであった。Rの夫は、結果としてLのもとで技術を学び、その後もLからの発注で、委託作業は原則自宅で行うという条件のもと了承するに至っている。現在では、Rの娘もLのもとへ見習いとして通っており、Lは「Rの夫は私の夫や家族のことも知っているし、私のもとであれば安心だと思っているのよ」と語っていた。LとRは、Rの夫が「厳しい人」であることを熟知し、そのため許容範囲

が近所や知人宅に限られることを想定していた。これは前述したDの言う「限度」や「境界を見極めること」と共通しているが、相手に認めて貰える領域を推察し交渉することも彼女たちの戦略の一つであった。

Kの夫もRの夫と同様、Kが自宅の外に出るのを嫌がったため、Kは専業主婦として14年間、家事と育児に専念する生活を送っていた。だが「昔みたいに水汲みや料理を一からやる時代じゃないのに、毎日朝から晩まで自宅にいて、“何か”を学びたいという強い情熱を抱くようになった」として、Kは自宅と同じカスバ地区内にある青少年センターで職業訓練の講座を受講したいと夫に話したという。Kの夫は、勤めていた国営企業が1990年代に解体され失業し、短期雇用の職を転々としながら建設分野の中小企業を立ち上げた経歴を有する。「家事と育児を理由に、働くのを禁じた」(K)ため、青少年センターに通いたいと申し出た際は自宅を定期的に留守にすることを嫌がり、「説得するのが本当に大変だった」とKは想起する。最終的にKは、ムスリムで毎週金曜の礼拝を欠かさない夫に対し、次のようにイスラームを引き合いにすることでようやく説得することが出来たと語った。

自宅にあった植木を指して、夫に言ったの。“イスラームでは、神が創ったこの植木の花ですら自らの役割を果たし、何かに貢献している。それなのに、私は一日中家にいて家事と育児をこなし、世の中に何も貢献出来ていない。”って。(K)

Kは、家事・育児に専念する生活に満足せず、自宅外で新たな技術を身につけることで自らの価値を見出せると考えていた。そのため、当初は「何を」学ぶかについては重視しておらず、実際に夫の了承を得た後は自宅から離れた職業訓練センターにも通い、パソコンのメンテナンスから文書処理、フラワーデコなど複数の講座を履修している。Kの夫も、理解を示した後はKのためにパソコンを購入し、仕事のサポートを依頼するようになったという。この場合、Kの夫は当初、「女性は家庭に留まるべき」という認識に基づき、自宅からわずか数キロの距離であっても妻が自宅を不在にすることを拒否していた。だが、Kが自身の学習する権利をイスラームと結び付けて主張したことで了承せざるを得ず、現在ではラマダン期間中の夜間展示販売への参加も認め、Kは「私が留守の間は子どもの面倒を見てくれるようになった」と評価している。

自身の学習する権利や働く権利の主張が家族の説得に重要なことはKのほかC、D、Nも認識していた。つまり、勉学や仕事のためであれば単独での外出も認められやすく、また自宅との距離や交通の利便性、家を不在にする時間帯等に配慮すれば制限をある程度緩和出来ると考えている。現に、DとNは将来的に単独で国外を廻りたいと考えているが、職人として展示販売に参加するという動機を用いて、あくまで仕事の一環であると家族に主張すれば了承を得られるだろうとみなしていた。

V. おわりに

本稿では、アルジェリアにおける女性の「伝統的役割としての家内労働」の位置付けを再考するという目的に基づき、以下の3点について論じてきた。第一に、伝統的な性別役割規範が技術習得・職業選択においても依然として支配的である一方、二項対立的な空間分離に基づき女性を家庭に留めるという伝統的家内労働の特徴は薄れつつあり、むしろ外出の機会創出や現金収入の獲得など性別役割とはかけ離れた自己の実現を目指して女性は家内労働に従事する傾向もあることを明示した。次に、伝統的家内労働であっても自立意識の形成や、長年の経験に基づき自信が強められる可能性について示唆した上で、技術習得や仕事として家内労働を始める際に家族の反対に遭った女性が、どのような説得方法や言説を用いて仕事の了承を得たかという問題について取り上げた。その考察分析の結果、調査対象者たちは「良き妻＝母または真面目な娘」としての役割の遂行や宗教を引き合いにすることで説得や交渉を有効に導いたり、父親や夫の性格から許容範囲や限界を見極めることで戦略を企てたりすることを明らかにした。これらの調査対象者に共通するのは、妻＝母または娘としての自らの役割を器用にこなすのと並行して、外出願望の実現や経済的自立を目指すという、伝統的性別役割を越えた自己意識の形成および活動空間を獲得しているということである。単なる女性の間で受け継がれてきた伝統的家内労働の保護・継承という役割や「男性は外、女性は内」という固定的なジェンダー空間の再生に資するのではなく、伝統的規範や現存する関係性を受け入れつつ既存の関係に変化を促していくための戦略として、女性が主体的に選んだ働き

方の一つが内職であった。

世帯内の関係性に視点を移すと、内職による収入で家計支出を負担する割合が高ければその分家計支出に行使しうる女性の影響力も高まっていた。これは、エジプトの事例をもとに、女性の地位は役割分業に応じ個別に変化すると指摘した従来の知見 [Singerman & Foodfar 1996] を裏付けるが、本稿で扱った対象者の中には、Kのように内職による収入を家計に入れない場合でも夫は「働く妻」に対して理解を示し、家事や育児に協力的な姿勢を見せる例も見られた。このような世帯内の関係性に変化が生じたのは、女性が経済力を獲得しただけでなく、家庭内での作業を基盤とする活動であるからこそ、その仕事ぶりや能力を家族に披露しやすいという特徴も影響していると思われる。家内労働という性質ゆえ、「妻」や「娘」が家庭内で「手工芸職人」となっていく過程自体が、世帯内で繰り広げられる交渉過程を優位に働かせると同時に、仕事に対する理解をも深めさせていた。内職従事者の世帯内における地位は、このような一連の流れの中で「良き妻＝母または真面目な娘」であると同時に「手工芸職人」であるという、二面的な要素を取得していく過程と同時進行で変化している。

しかしながら全ての対象者がこのような交渉や説得を実現できたのではなく、例えばほぼ無職であったJの元夫は、Jが働くことを頑なに拒否し、その後も周囲には自らがJの事業資金を負担していると偽っていた。結局、Jの場合は互いに対する不満が募り離婚に至っている。よって交渉自体が難しい場合や説得可能な範囲にも個人差があるが、これまで見てきたように自らの役割を器用に振る舞いながら説得したり、宗教を引き合いにしたり、交渉可能な領域を見極めたりしながら、自らの仕事ぶりや能力を家庭内で披露するといった手法を駆使することで、交渉可能な領域の拡張や意見を通せる余地が生み出されていた。

最後に、対象者が度々言及した限度・限界について考察したい。階層や学歴に恵まれない場合に内職が現実的かつ合理的であるという特徴に鑑みれば、内職は女性に一定の行動の自由と経済的自立を促すものとして機能する。だが学歴や就業経験に乏しく、父親や夫が厳しい家庭出身の女性にとっては世帯内で交渉可能な経済参加の範囲は家内労働の枠をなかなか超えられず、職業選択の自由は家庭を基盤とする経済活動に限定される。交渉可能な範囲は原則この「限界」内部においてであり、それを乗り越えることは容易ではなかった。そのため、「良き妻＝母、真面目な娘」としての役割の枠組みや境界は交渉・説得のたびに新たに再構築され、その延長線上に内職従事者としての立場が保障されているとも言えるが、彼女たちの選択の幅や行動範囲を定める境界線は、こうした日常的に繰り返される戦略を通じて常に拡張する可能性を孕んでいるのである。

〔註〕

1. アルジェリア憲法第3条では、2002年より、ベルベル系言語の総称であるTamazighが国語として明記されている (Loi n° 02-03 du 10 avril 2002 portant révision constitutionnelle参照)。
2. 周辺国と比較すると、15才以上の女性人口のうち女性就業者が占める割合はモロッコ27%、チュニジア25%、エジプト24%、リビア30%、モーリタニア29%に対してアルジェリアは15%となっている。http://data.worldbank.org/country. 最終アクセス日2015年11月25日。
3. アルジェリア家族法 (Loi n° 84-11 du 09 juin 1984 portant code de la famille, modifiée et complétée) 第74条～76条を参照。
4. 現行のアルジェリア家族法では世帯主に関する規定は見られない。他方、アルジェリア統計局 (ONS) による定義では「金銭利用全体に関する決定権を持つ男性または女性居住者で、世帯構成員より世帯主と認知されているか自ら世帯主として申告する者」と明記されている。
5. Oussedik, Fatma et al. 2012 *Mutations familiales en milieu urbain Algerie 2012*. Oran : Editions CRASC. 調査は主要都市 (首都アルジェ、アンナバ、オラン、コンスタンティーヌ)、大都市 (ベジャイア、ブリダ、モスタガネム、ゲルマ)、中都市 (アフルー、ブーサーダ、シグ、アルフルー) の計1200世帯を対象に行われた。

〔参考文献〕

- 鷹木恵子 2002. 「チュニジア農村部女性の内職にみる民俗知識と技法」 大塚和夫編『現代アラブ・ムスリム世界』、世界思想社 117-165.
- Aïssat, Mohand Tahar. 2011. "La division genrée du travail dans deux entreprises industrielles situées dans la région de Béjaïa (Algérie)", *Entrepreneurs Maghrébine : Terrain en développement*, Danieuil, Pierre-Noël and Madoui, Mohamed ed. 227-234. Paris: Editions Karthala.

- Benatia, Farouk. 1970. *Le travail féminin en Algérie :Département d'Alger*. Alger: SNED.
- Berik, Gunseli 1987. *Women Carpet Weavers in Rural Turkey: Patterns of Employment Earnings and Status*. Geneva: ILO.
- Boufenik, Fatma. 2010. "L'intégration du genre dans l'approche de l'économie informelle: Le cas de la production domestique". Ph. D. diss., Université de Tlemcen.
- Bourdieu, P., Darbel, A., Rivet J., Seibel, C. 1963. *Travail et Travailleurs en Algérie*. Paris: Mouton & Co.
- Guetta, Maurice. 1991. "Urbanisation et structure familiale en Algérie (1948-1987)", *Revue française de sociologie*, vol.32, n° 32-4, 577-597.
- Kelkoul. 1995. "Femmes et secteur informel", *Femmes et Développement*, 255-279, Oran: CRASC.
- Laoust-Chantréaux, G. 1990. *Kabylie, côté femme: la vie féminine à Ait Hichem, 1937-1939: notes d'ethnographie*, Aix-en-Provence: Edisud.
- Laloë, G. 1910. *Enquête sur le travail des femmes indigènes à Alger*, Jourdan Alger. Alger.
- Makilam. 1996. *La magie des femmes kabyles et l'unité de la société traditionnelle*, L'Harmatton, Paris.
- Messick, Brinkley. 1987. "Subordinate Discourse: Women, Weaving and Gender relations in North Africa", *American Ethnologist* vol. 14, No. 2, 210-225.
- Sambron, Diane. 2013. *Les femmes algériennes pendant la colonisation*, Casbah Editions, Alger.
- Singerman, D. & H. Foodfar. 1996. *Development, change, and gender in Cairo: a view from the household*, Bloomington & Indianapolis: Indiana University
- Office National des Statistiques de l'Algérie. 2013. *Enquête emploi auprès des ménages 2013*. Alger: ONS.
- Office National des Statistiques de l'Algérie. 1989. *Enquêtes auprès des ménages (M.O.D.) 1989*. Alger: ONS.
- Office National des Statistiques de l'Algérie. 1990. *Enquêtes auprès des ménages (M.O.D.) 1990*. Alger: ONS.